

えこあっぷ! リポート

生態を学んでカラスとじょうずにおつきあい

パネルディスカッション「街のカラスとどう折り合うか」(たきかわ環境フォーラム主催)が5月29日午後、滝川市森のかがく活動センターで開かれ、人間にとって最も身近な野生動物ともいえるカラスについて、生態に詳しいパネリストと市民たちが意見を交わしました。(文・平田剛士、写真・北谷孝範)

「カラス管理には個体数変動のモニタリングが必要です」

——— 玉田克巳さん

「営巣期に人を襲ったりするのは、ほとんどハシブトガラスとみて間違いありません」と解説したのは、野鳥研究者で日本鳥学会会員の玉田克巳さん。「街に生きるカラスの生態」と題して講演しました。

日本にはハシボソガラスとハシブトガラスが分布していますが、その生態を比べると、たとえばハシボソは街路樹や防風林などによく巣を掛けるのに、ハシブトは木の密集した林のような環境に好んで営巣するそう。営巣条件にも差があって、ハシボソが高さ12~13メートルの樹上に巣を作るのに対し、ハシブト

は15~18メートルと、比較的背の高い針葉樹に巣を作る傾向があることが紹介されました。「ハシブトは神経質なのか、営巣場所を選ぶとき、高くて外から見えにくい場所にこだわりを持っているようです」と玉田さんは話します。

また玉田さんは、カラスによる農業被害が全道で2億5000万円にのぼり、毎年約7万羽が駆除されていることを示しながら、「でも、カラスの個体数やその変動はまったく分かっていないんです。従来のような駆除だけでなく、近ごろはカラス管理の一つの方法としてゴミの

管理が提案されていますが、それで本当にカラスを減らせるの科は、不明です。個体数の変動をモニタリングすることが大事だと思います」と話しました。



玉田克巳さん

「カラスの死体にパニックを起こす必要はありません」

——— 武田忠義さん

たきかわ環境フォーラム運営委員の武田忠義さんは「カラスと鳥インフルエンザ」と題して講演しました。春先の鳥インフルエンザ騒ぎについて、「致死率を考えれば、鳥インフルエンザより、人間のインフ



武田忠義さん

ルエンザ感染者のほうがよほど危険」と話します。「まわりをニワトリに囲まれて生活しているのでもない限り、野鳥から感染する危険はほとんどありません。鳥インフルエンザで死んだカラスが見つかった後、『カラスがゴミを漁っているけどどうしよう?』というような相談まで受けましたが、ナンセンスです」。

けれど、だからといって人獣共通感染症 人も野生動物もかかる病気を侮るべきではありません、と武田さん。「イヌやアライグマなどが媒介する狂犬病、ネズミが媒介するペスト、あるいはサルモネラ、オウム病など、人獣共通感染症は

たくさんあるんです。たとえば西ナイル熱という病気は野鳥と蚊が媒介しますが、人に感染すると致死率は非常に高い。流行国からの飛行機に蚊が紛れ込んでいれば、日本にも危険があります」。

ペットや食物として大量の生物が輸入されている現状を、武田さんは「日本の常識は世界の非常識」と表現。イヌやネコの輸入すら禁じているオーストラリアを例に挙げながら、人獣共通感染症に対する「リスク管理」の重要性を強調しました。

(このパネルディスカッションのより詳しい記録は、たきかわ環境フォーラムのウェブサイトでご覧いただけます)

楽しかったね♪ 森のかがく活動センターイベント報告！

初夏の自然観察会

6月12日(土)、3歳と小学2年生を含む22名が参加し、東公園一帯の植物や野鳥を、2時間半にわたり観察しました。

観察会の結果わかったこと

公園内にはタンポポモドキ、コウリンタンポポ、ヒメオドリコソウなどの外来種がはびこり、在来種が肩身の狭い思いをしている。

クワとヤマザクラの木に、野鳥が

運んでくれるのを待っているかのように実がたわわについていた。

野鳥は子育て中で、ヒナにエサを運ぶものや、すでに巣立ちした幼鳥が観察された。

JR根室線の鉄道の周りはヨシなどが生い茂り、ノビタキやオオヨシキリの格好の営巣場所になっている。

観察されたおもなもの

カッコウ、ムクドリ、ホオアカ、ハクセキレイ、トビ、アオサギなど20種

参加者の感想

「観察会で説明を聞いて、鳥や花の特徴がよく分かった。普段、妻と2人で見るとより多くの自然に触れ合うことができた。」(滝の川町・佐藤秀一さん)

「冬の間はバードテーブルの鳥を楽しんでいますが、望遠鏡で見た愛らしい姿を見て、ますます野鳥が好きになりました。」(黄金町東4丁目・守屋蓉子さん)

親子でバンディング体験

6月26日(土)、遊学会と環境フォーラムの共催事業「親子でバンディング体験」がおこなわれました。

日本野鳥の会滝川支部のご協力のもと、小1から小5までの子供10名と、保護者7名が参加し、初めて近くで見る鳥の姿や触った感触など、貴重な体験をとおして、自然の仕組みを学んでもらいました。

バンディングとは標識調査と呼ばれ、カスミ網を仕掛けて捕まえた鳥

の体重、翼長、尾長などを測定し、調査者の識別リングを取り付けて放し、鳥の移動状況や渡りのルートを調べるものです。環境省から委託された山階(やましな)鳥類研究所が全国で行っているもので、調査は有資格者が行います。

昨年の6月21日にも同じ場所で調査を行い、9種19羽にリングをつけて放しました。今年の放鳥数は6種14羽でした。特筆されるのは、昨年のリングをつけたクロツグミとコルリの「リターン」がいたことです。このことから、貴重な森を守

る大切さを参加者に理解していただきました。

また、ツグミの仲間が短時間に多数捕獲される場所は、道内でも珍しいことで、バンディングによる管内の詳しい野鳥生息調査の必要性を痛感しました。

後半には安西教育長、谷田部教育部長も現場を訪れ、指導の猿子(ましこ)正彦氏(日本野鳥の会札幌副支部長)から、野鳥観察をとおして命の大切さを子どもたちに伝える教育の重要性の話に耳を傾けていました。

今年の放鳥データ

クロツグミ(5)、コルリ(3)、カワラヒワ(2)、アカハラ(2)、アオジ(1)、センダイムシクイ(1)

(越後弘 = たきかわ環境フォーラム事務局長)

古紙でハガキが出来ちゃった！～手漉き講座に親子ら参加～

たきかわ環境フォーラム主催の市民向けエコアップ講座「古紙で作ろう手漉きハガキ」が6月27日、森のかがく活動センターで開かれ、約20人がちょっとユニークな紙漉きを体験しました。

講師に迎えたのは、渡辺増子さん、板倉智津子さんのお二人。新聞の折り込みチラシや包装紙、ボール紙などの古紙を材料にして、新しく色とりどりのハガキを漉くのが目標です。

まず、精密秤で古紙5～6グラム分を計量します。7グラム以上になると50円切手では投函できなくなるので、厳密に。適当な大きさにちぎったら、1リットルほどの水と一緒にミキサーにかけ、どろどろにします。パルプの繊維が少し残る程度

に仕上げるのがコツです。

特製のハガキサイズの紙漉き用の木枠に金網と薄布をセットして洗面器の水中に保ち、枠の中にしずかに原料を流し込みます。水を切ったら、静かに枠を外し、薄布をもう一枚被せてから、絞った濡れタオルで静かに押さえて水気を取り除きます。

金網を外して、2枚の薄布に挟まれた状態の原料を、今度は乾いた雑巾で挟み、体重をかけてさらに水分を吸収させます。生乾きになってパルプがじゅうぶん固まったところでアイロン台に移し、熱したアイロンを当てながら、時間をかけてよく乾燥させます。最後にハンコで郵便番号の記入枠を押せば、手漉きはがきの出来上がりです。

使用する古紙の模様や色、材質の違いによって、出来上がるハガキの色や風合いもさまざま。予想以上の出来映えに参加者たちは大喜びで、最後はアシスタントの國學院短期大学・福祉問題研究会の面々も、このオリジナルハガキづくりに熱中していました。

(文・平田剛士)



古紙を原料にした手漉きハガキを仕上げる参加者たち

エコアップ宣言 みんなでエコアッ！

武田忠義

番外編 「ボクを拾わないで!？」

夏になり、小鳥たちも歌を休んで子育てに専念しています。まだ上手く飛べないひな鳥の微笑ましい姿も目にしますが、ちょっと困った問題が起きるのも今の時期です。そこで今回は番外編、野生動物の救護について書くことにします。

<おねがい、ボクをひろわないで!>

毎年春になると、日本野鳥の会で「ヒナをひろわないでキャンペーン」を実施しています。道庁も野生動物の子供を保護しないように呼びかけています。

野生動物が人間に保護される原因はいろいろありますが、春から夏にかけて一番多いのが、実は、まだ独り立ちできない子供を“まちがって”保護してしまうことなのです。

巣立ちしたばかりの野鳥のヒナはまだ十分に飛べず、警戒心も強くありません。迷子のように見えても、人がいるので親鳥が近づけないだけかも知れません。また、エゾシカやエゾユキウサギの幼い子供は、外敵に見つからないように母親から離れた場所でじっと動かずにいます。マガモの母親もいよいよ危険が迫ったら、ヒナたちに動か

ないように命令し、自分は敵の注意を引くためにその場から飛んでいきます。

この時期は、こういった、本当は迷子でも何でもない動物をつれてきてしまうことがよく起こるのです。人は良いことをしているつもりでも、野生動物にとっては大変な迷惑です。

<なぜひろってはいけないのか>

そうはいつでも普通の人は、目の前にいる野生動物の子供が本当に迷子かどうかわかりません。わからなければ「とにかく助けよう」と考えるのは悪いことではないように思えます。

しかし、迷子の野生動物を助けるのが良いことは、必ずしもいえません。

まず、野生動物を育てるのは大変難しいことです。好む餌や環境などの生態を知っていなければなりませんし、野生動物は人間を恐れ、逃げようとして弱ってしまいます。命を助けること自体大変なのです。もし上手く育てることができても、野外で生きていくための訓練が十分できません。

つまり人間が助けるのが難しい

Q = なぜ地面に落ちているヒナをよく見かけるのですか？

A = 巣立ちしたばかりのヒナはうまく飛べません。だから、枝から枝へ移る時などに、地面に降りたりしてしまうのです。

Q = ヒナを見つけた時、どうしたらいいのでしょうか？

A = 近くに姿が見えなくても、親鳥は必ずヒナのもとへ戻って世話をします。人がヒナのそばにいと、かえって親鳥はヒナに近よれません。そのままにしましょう。



Q = ネコが近くにいる心配ですが...

A = 近くの木の枝先など、ネコが近よれない所にとまらせておきましょう。

Q = 人が野鳥のヒナを育てることはできないのでしょうか？

A = 私たちはヒナに飛び方や、何が自分にとって危険なのか教えられません。自然の中で自立していきけるように育てるというのはとても難しいことなのです。また、野鳥を飼うことは法律で禁止されています。

「日本野鳥の会のホームページから」

が死に、そのことによってたくさんの動物が生きて行くことができるという事実です。一人立ちできずに死ぬ動物がいても、それは自然なことなのです。

のならば、迷子だと思っても、人が保護するより、親が戻ってくる可能性に期待した方が、その子供のことを考えた場合より賢明な判断かも知れないのです。

もう一つ忘れていけないのは、自然の中ではいつも、たくさんの動物

<野生動物を助けるということ>

傷ついたり弱ったりした野生動物を助けることはよいことだ、と皆が何とはなしに思っているのですが、よくよく考えていくと、それが本当に良いことなのかどうか、わからなくなってしまう。

希少種ならば、例えば傷ついたシマフクロウを助けることは、種の絶滅を防ぐ大きな意味がありますが、これがスズメだと、一羽を助けたところで自然界に与える影響はほとんどゼロでしょう。良いか悪いかに無理に分けると、むしろ、悪いことかも知れません。弱い個体の死は他の仲間や他の種類のためになるのですから。(人間が原因の

事故については、ちょっと、別問題ですが)

ですからスズメを助けることが自然保護かという、少なくとも、“どうしてもやらなければならない”とは言い切れません。

一方で、傷ついた動物が保護されたとき、これも何かの縁と思って助けも、それが間違いなく悪いことである、とも言い切れないでしょう。

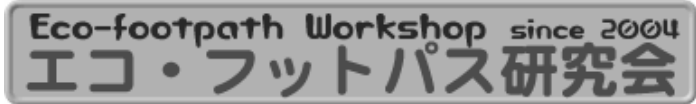
また、一羽のスズメを助けようとしただけでも、それを通して自然界のたくさんのことを知るができます。動物が弱ったり傷ついたりした原因を究明することで、次の事故を防ぐことができたり、伝染病の発

生や環境汚染の原因を突き止めたりすることにもつながります。

このように、野生動物の救護は難しい問題で、これが正しい考えであるという結論は、簡単には出せません。法律でも「こうするべきである」という方針はありません。迷子問題はさて置いて、もっとみんなが考えなければ問題だと思えます。

なお、野生動物を保護した場合には、道庁(空知支庁の環境生活課)への連絡を忘れずに。また、伝染病のおそれがありますから、手洗いやうがいは欠かさず行いましょう。

エコ・フットパス研究会を 開催しました。



はじめに

6月12日土曜日の午後、泣き出しそうな空模様の中、エコネットワークの小川巖さんを迎えてエコ・フットパス研究会が開催されました。

フットパスとは

まず、センター内でフットパスについて認識を深めるためのディスカッションを行い、小川さんからフットパスに関するお話がありました。

「フットパスとは遊歩道や自然歩道とも異なり、また健康目的のウォーキングとも異なる、文化、歴史、自然さらには農林業ともふれあいながら、地域や人々とのつながりをもたらす、歩くことを目的とした道のことです。

先日イギリスのフットパスを歩いてきたのですが、24万キロにおよぶフットパス網が張り巡らされて

いて、多様な形態があります。人だけが歩く道やバイウェイといって馬に乗った人も通れる道があります。とにかく地図を片手に歩くのですが、本当にいろいろな意味で楽しく歩ける道でした。

北海道でも地域の環境に合った形で、フットパスを作ったり、歩いたりする活動が各地で始まっており、これにより地域を知ったり、地域の人たちがルートを作ることによる地域おこし活動となっているところがあります。

フットパスは既存の歩ける道を

利用して設定でき、例としては農道、林道、畦道、用水路沿いの管理通路、堤防上の管理通路、送電線の管理通路、河川敷、廃線跡、サイクリングロード等でも簡単にできます。

さらに、フットパスの利点は「つながり」です。それぞれの地域で作ったフットパスをつなげていけば数100キロのフットパスをつくることも可能であり、イギリス並みのフットパスに成長させることもできます。」

滝川でのフットパスの可能性

滝川でのフットパスの可能性を探るため2万5000分の1の地図でルート確認作業を行いました。候補地としてはやはり丸加高原方面ということになりました。以下のコースを今回は車で確認しました。

あいにくの雨になりましたが、東滝川(旧畜産試験場-花・野菜技術センター)から道々江部乙赤平線へ抜ける砂利道を通り、丸加高原のゴルフ場横から展望台と伝習館へ。途中から雨は上がり、伝習

館北側の砂利道、東15丁目、高速道路管理通路(砂利道)を通り、東13丁目のカラマツ採種園(空知森づくりセンター管理用地)へ到着しました。

ここで、ウッドチップを固化した舗装とウッドチップを敷いただけの通路を参加者で体験しました。車椅子の参加者もいて、久しぶりに林の中に出てきたと感動されておりました。固化した舗装は車椅子でも走行可能ですが、チップを敷いた

だけでは車椅子の車輪がめり込んで走行不可能でした。

続いて東11丁目。ここは果樹農家があり、さらに過去から現在まで様々な芸術家やその関係者を輩出した地域です。さらに、西10丁目のファームレストラン「ママズキッチン」前を通過して、石狩川沿いに南下してセンターへ戻ってきました。

参加者の感想

・短時間の江部乙地域の探査でしたが、滝川に在住していてもなかなか回ることができない場所があり、滝川を再発見することができた。

・車椅子での参加があり、障害者の視点でのフットパスを考えるきっかけにもなった。滝川独自のフットパスとして障害者も参加できるとい

う新たな方向性があれば、新しいフットパスの魅力になるかもしれません。

これからのこと

今後もこのような調査等を行いながら、フットパスを少しでも多くの人たちに理解してもらうような活動を

少しづつ行っていきたいと思います。

さて、みなさんもフットパス活動に

参加したいという方がおりましたらぜひ「森のかがく活動センター」へ気軽にご連絡ください。

(高橋一美 = たきかわ環境フォーラム)

平成16年度 たきかわ環境フォーラム総会が開催されました

平成16年度たきかわ環境フォーラム総会が、6月27日(日)森のかがく活動センターで開催されました。平田代表の挨拶につづき、平成15年度の事業報告及び決算、平成16年度事業計画及び予算案が承認されました。

また、議事の中ではフォーラムの規約改正にともない、新たに会員を募集することとし、活動の輪をより一層広げていくことなどが話し合われ、閉会しました。



森のまつり・ピクニックコンサート

8月1日(日) 午前10時～ (雨天中止)

会場：森のかがく活動センター

森の音コンサート 11時～14時 出演：渡部昭彦 スイード 腐葉土(民族音楽グループ)	出店 若草友の会 新鮮野菜の直売 ほほえみ工房 ヨーヨー
食べ物コーナー 揚げドーナツなど手作り食品コーナー 焼き鳥もあります ポップコーン・わたあめ	フリーマーケット 10時～掘り出し物を見つけよう
森のかがく活動センター内では... 1階研修室 ネイチャービデオ上映『木漏れ日のなかで』(制作:越後 弘) 2階展示室 ネイチャーフォト・『大崎 順助』展	

そして、まつりといえば!

14時から「もちまき」があります!

みなさん、あそびにきてくださいね～～～

ぼくは、森のかがく活動センターの案内役です!
 ぼくに名前をつけてね。まってるよ!

forest_00@mist.ocn.ne.jp
<http://www15.ocn.ne.jp/~forester/>



これからも続々!

たきかわ環境フォーラム主催事業計画

2004年度えこあっぷ講座などのご案内

7月25日～	「えこあっぷ!」講座・ワークショップ 「丸太小屋を建てよう」 講師 金子 守さん(大工)
8月1日	森のまつり・ピクニックコンサート 出演 渡部昭彦さん(フォーラム委員)ほか
9月	「えこあっぷ!」講座・ワークショップ 「ふくろうを観察しよう」 講師 北谷孝範さん(センター職員)
9月26日	パネルディスカッション 「街路樹問題を考えるパート3 落ち葉とのおつきあい」
10月	「えこあっぷ!」講座・ワークショップ 「森のクラフトづくり」 講師 渡辺増子さん(工芸作家)
10月31日	「えこあっぷ!」講座・ワークショップ 「移入種問題を考える」 コーディネーター 平田剛士さん(たきかわ環境フォーラム)
11月	「えこあっぷ!」講座・ワークショップ 「バードカーピングをつくろう」 講師 北谷孝範さん(センター職員)

このほかにも通年事業や各種勉強会、会合を開く計画です。どうぞお気軽にご参加ください。

山菜名人のひと口！ セリ(その2)

今回は、家庭菜園でセリを栽培するという、春から秋までセリを楽しむ裏技をお教えしたが、さあ、いよいよ調理に移ろう！ セリは薬草ともいえ、文字通りの「健康料理」です。

1. おひたし	根・茎・葉を全部使います。ゆでて、冷水にさらしてアクを抜くだけ。
2. 和えもの	根・茎・葉を全部使います。ゆでて、アクを抜いた後、好みの調味料を加えて和えます。マヨネーズ和えのほか、からし醤油和え、ゴマ和え、ピーナッツ和え、ゴマみそ和え、酢みそ和え、白和え、納豆和え、クルミ和えなどがお勧め。
3. 油炒め、 きんぴら	セリの根をいただきます。泥をよく洗い落としてから、食べやすい大きさに切って、さっと炒めます。
4. 天ぷら、素揚げ	風味豊かな葉をいただくなら、揚げ物が最適。
5. 煮物	茎をいただきます。切りそろえた材料に塩をふり、小型の漬け物容器などに入れて一昼夜、重石をかけて塩づけに。調味しだし汁でさっと煮ます。
6. 炊きこみご飯	切りそろえた茎をお米と一緒に炊きこみます。
7. 浅漬け	
8. 添えもの、つま(花)	

最後に一口……！ 家庭菜園のセリは、伸び放題にしておくとう花が咲き、硬くなってしまうので、花を咲かせないように、秋まで数回、刈り込む必要がある。ただし、刈り込む時は、地上部から3節以上を残しておくこと。

これであなたも「セリ」博士！

ああ、わすれもの！ 日陰用マメ類は毎年同じ場所に植えると連作障害になるので「日影ネット」なども利用して下さいね！

(南川和廣・森のかがく活動センター館長)

えこあっぷ！^{くらぶ}倶楽部 丸太小屋を建てよう！

たきかわ環境フォーラムでは、親子で参加する体験型のイベントとして、森のかがく活動センターの裏庭に小さなログハウス(丸太小屋)を建設します。樹木や森林に関する知識を深め、木や道具に触れながら基本的な扱い方をマスターし、ものを作る喜びを体験できるまたとないチャンスです。この夏休み、みんなで一緒に丸太小屋を建ててみませんか？

募集対象: 滝川市内在住の小学5年生以上中学3年生までの児童・生徒とその親

定員: 15組(計30名)

申込方法: 問い合わせの上、所定の参加応募用紙に必要事項を記入して、たきかわ環境フォーラム事務局までお申込みください。

定員になり次第締切ります。

日程: 7月25日(日) 8月1日(日)・8日(日)・22日(日)

参加費用: 無料 (但し、傷害保険料がかかります)

滝川市 森のかがく活動センター情報誌

えこあっぷ！ 第8号 2004年7月20日発行

発行 滝川市 森のかがく活動センター

編集 たきかわ環境フォーラム・えこあっぷ！編集委員会

深町亜紀 / 平田剛士 / 北谷孝範

郵便番号 073-0034 北海道滝川市空知町2丁目6の31

森のかがく活動センター内 TEL/FAX 0125-22-3410

電子メール forest_00@mist.ocn.ne.jp

ウェブサイト http://www15.ocn.ne.jp/~forester/

フォーラム会員

募集中！

あなたも

たきかわ環境フォーラムの
会員になりませんか！

お問い合わせはこちらまで！